

東歌の挽歌

一 序

「東歌」の総題のもと、万葉集卷十四に古代東国地方の歌々が聚められた、その根源の理由とは何か。東歌研究における最大の謎ともいふべきこの疑問について考えるとき、まず注目されるのは巻頭五首(三三四八〜五二)であろう。

これら五首が特に注目されるのは、単に巻の冒頭というその位置からだけではない。「東歌」を標榜して巻頭に位置する歌でありながら、いっこうに東歌らしからぬという不自然な性格にもある。主に「雑歌」表記の有無に關し、卷十四目錄の様相をめぐって、五首については、東歌五首論(窪田空穂「万葉集評釈」、朝地威雄「万葉集東歌の成立」国文学研究三三三三四巻)ともいふべき諸説が、存在するほどである。万葉集に、ある巻が存在する意義について考えようとするとき、冒頭部に目がいくのは自然であろう。

以上の巻頭歌群を巡る諸論とは別に、巻末の歌に視線を注いだ論がほとんど見られないことは、本稿にとつてまことに不思議で

間 江 立 恵

ある。冒頭歌と同様、巻末の歌についても編者の何らかの意図有りとして、殊更に注目すべきだと思ふからである。

東歌の構造は大きく勘国歌と未勘国歌に二分され、前者には「雑歌」(ただし、部立名は伝来本には脱落)、「相聞」「警噓歌」、後者には「雑歌」「相聞」「警噓歌」「防人歌」「挽歌」の部立がそれぞれ配されている。そして、計二三〇首の歌々からなる卷十四東歌の棹尾は、「挽歌」の部立のもとにたつた一首のみ置かれた、次の歌によつて結はれている。

愛し妹をいづち行かめと山昔のそがひに寝しく今し悔しも

(14三五七七)

愛しい妻がどこへも行くはずがないと思つて、あの一晩、山昔のように背中合わせに寝たことが、今となつては悔やまれてならない、の意。妻の死後、かつての共寝を思い出しての嘆きである。その夜、夫婦には些細な諍いでもあつたのだろうか。明日があると思えばこそその行為であつた。しかし今、その妻は逝つてしまつた。これから未来にかけて永劫に続く孤独と寂寥感、そして後悔。

残された者の嘆きに溢れたまさしく挽歌といふべき一首である。

巻末の一首に込められた編纂者の意図、という観点から当該歌について考察するとき、別にもう一点考えておくべきことがある。それは、東歌の担い手たちと同郷の人々、つまり古代東国地方から徴集された防人たちの一一六首にも及ぶ関係歌群（家持歌及び関係歌を含んで四三二一～四四三六）、所謂「防人歌巻」（伊藤博「古代和歌史研究8」）を中心とする歌群の最末尾一首の在り方である。

昔年相替防人歌一首

闇の夜の行く先知らず行く我れをいつ来まさむと問ひし子らはも
(20四四三六)

闇の夜、それではないが、行く先も分らず行くこうとする私に、今度は何時いらっしやるのと尋ねた愛しい妻よ、の意。上三句では、どこへとも知らず連行される「我れ」の運命が「闇の夜」の表現を以って沈痛に語られ、下二句は「子らはも」の詠嘆とともに妻への深々とした思いをうたう。家族と別れ、はるかな地へ旅立たねばならなかった当時の防人たちの心情を代表してうたった一首といえる。

片や東歌、片や防人歌巻の、ともに最終歌である二首は、それぞれが「結び」に位置するという点で本質的に共通する。加えて、二首には指摘しておくべき共通点がもう二つほどある。その一つは、先述したように、歌巻の結びに一首のみ孤立して置かれているといふその在り方である。三五七七番歌は挽歌の部立のもとに

一首のみ、四四三六番歌は宴歌三首（四四三三～三五）の後に「昔年相替防人歌」と題されて一首のみである。

二つには、二首がいずれも他の巻に、所謂「類歌」と呼ばれる歌をもっている点である。分かり易く示してみよう。

I 愛し妹をいづち行かめと山背のそがひに寝しく今し悔しも
(14三五七七)

i 我が背子をいづち行かめとさき竹のそがひに寝しく今し悔しも
(7一四二二)

II 闇の夜の行く先知らず行く我れをいつ来まさむと問ひし子らはも
(20四四三六)

ii 大海の奥かも知らず行く我れをいつ来まさむと問ひし子らはも
(17三八九七)

類歌とは、歌の発想、またその構造や表現が似通った歌をいう。I IIの類歌をそれぞれ i ii として右にあげた。当該歌 I の類歌 i は、奈良朝の作者不明歌一三首をあつめた巻七の「挽歌」に位置し、京人の作と推測されるものである。一方、防人として大宰府に向かう旅の中でよまれた II の類歌 ii は巻十七に存在する。題詞から天平二年に任果てた大伴旅人が大宰府から帰京する際に、その僱従らが船旅においてよんだということが知られる。

以上、I IIの二首にみられる共通点を二、三指摘した。こうした類似にはどのような意味があるのだろうか。そこで、まずは当該歌 I について、これまで指摘されてきた疑問点を整理してみよ

う。

第一に、万葉集三大部立の一つに数えられる「挽歌」の部立のもと、ぼつんと置かれた一首の様相についてである。何故たつた一首のために「挽歌」という部立を用意し、まるで追補のような形で一首を載せる必要があったのか。この点については既に古く賀茂真淵「萬葉考」（以下「考」という）に発言があり、

こ、に挽うたを一首のみ得て載んことおほつかなし、此巻も亂れし所々有事右にいへることくなれば、數々有しか落失しか、又此哥東哥とも聞へざるは他より加わりしか、

とある。また「考」は「此哥東哥とも聞へざる」とも述べており、この点が当該歌に関する第二の疑問点になる。東歌らしくないという一首についての評価は、「考」以後、鴻巣盛広「萬葉集全釈」（以下「全釈」という）や水島義治「万葉集全注」にもみられるものであった。ちなみに、「全釈」の解釈を次にあげておこう。

卷七の昔背子平何處行目跡辟竹之背向尔宿之久今思悔裳を山菅に取換へただけと言つてよい。同歌の異傳である。東歌らしくない作だ。

「全釈」は、「東歌らしくない」Iの歌が卷十四に存在する理由として、Iが卷七のiの歌の第三句を単に「取換へた」歌、すなわち「同歌の異傳」であったと推定する。このように、卷七に存在する類歌と当該歌との関係をどう捉えるべきか、ということも大事な論点として浮上してくる。たとえば、卷七の歌がもとの歌

で東歌ほうたい換えた作だとする説、逆に東歌をうたい換えたものが卷七の歌であるとする説、あるいはこのような型の歌が流布しており、双方それをうたい換えたものとする説など、諸説あつて、未だ定説を見ない。

以上、Iに関する問題点をあげてきた。巻の結びに「挽歌」としてただ一首置かれている点、東歌にありながら「東歌らしくない」と評される点、そして最大の問題として、iとの関係がある。本稿ではこれらの問題を中心に、まずは当該歌Iとその類歌iとの関わりについてみていこうと思う。

二 初句「愛し妹を」

I・iの二首は、発想はもとより歌の表現や構造が似通っているが、傍線を付した初句と第三句に違いがみえる。Iの初句「愛し妹」が類歌iでは「我が背子」となっており、東歌では男歌であったIの歌が、類歌iでは女歌に変わっているのである。また、第三句はどちらも同じ「そがひ」という語を導くための枕詞であるが、「山菅」と「さき竹」に違いがある。Iは「山に生えている菅」、iは「割った竹」で、植物であるという点だけは等しい。

まずは初句の違いに注目してみよう。Iの初句「愛し妹を」という表現は、集中二首二例しか存在しない。当該歌の他には、同じ卷十四に次の一首があるのみである。

愛し妹を弓束並べ巻さもころ男のこととし言はばいや片増し

に

(14三四八六)

一方、iの「我が背子を」という初句は集中に一二首一二例存在している。また、「我が背子」という語だけで数えれば一四九例にものほり、万葉集においてごく一般的な表現というしかない。これは、Iの「愛し妹」の用例数が先の二首を合わせても計四首しか存在しないのに対し、突に対照的な結果である。

加えて、「愛し妹」と「我が背子」のそれぞれが集中どの巻に多くよまれているのか、という点に注目すると、さらに興味深い結果が得られる。「我が背子」はその数の多さからも想像できるように、巻一から二十まで万葉集の全体にわたって用いられている。まさに、古代における最も一般的な女性から男性に対する呼称であったといえよう。それに対して、「愛し妹」はその数も集中四例と少ないのだが、何よりよまれた巻が万葉集巻十四と巻二十の防人歌巻に限られている点に注意すべきである。「愛し妹」という呼称のこの偏りは、古代東国地方に限定された男性から女性に対する呼び方であったことを暗示する。

1. 大君の命畏み愛し妹が手枕離れ夜立ち来ぬかも (14三四八〇)

2. 愛し妹を弓束なべ巻きもころ男のこととし聞かばいや片増し

に

(14三四八六)

● 3. 愛し妹をいづち行かめと山背のそがひに寝しく今し悔しも

(14三五七七)

4. 障へなへ命にあれば愛し妹が手枕離れあやにかなしも

(20四四三二、防人歌)

右の四例に加え、古代東国地方では京圏と異なり、その地方に限定的な呼び方が存在したのではないかと推測させる資料が他にも存在する。すなわち「愛し妹」という言葉を「妹」に限定せず、「愛し〜(人物)」という形で、呼ばれる対象を人物全般に広げて調べてみた場合である。「愛し子ろ」や「愛し背ろ」、あるいは單純に「愛しき」など、人物を「愛し」という形容詞を付した形で表現する例についてみてみると、右の推測をさらに補強する結果が得られる。

(1) 佐伯山卯の花持ちし愛しきが手をし取りてば花は散るとも

(7二二五九) 臨時

(2) 筑波嶺に雪かも降らるいなをかも愛しき子ろが布乾さるかも

(14三三五一) 東歌

(3) 上つ毛野久路保の嶺ろの葛葉がた愛しけ子ろにいや離り来も

(14三四二二) 東歌

(4) 左奈都良の岡に粟時き愛しきが駒は食ぐとも我はそとも追じ

(14三四五一) 東歌

(5) 大君の命畏み愛し妹が手枕離れ夜立ち来ぬかも

(14三四八〇) 東歌

(6) 愛し妹を弓束なべ巻きもころ男のことと言はばいや片増し

(14三四八六) 東歌

(7) 鳴る瀬ろにここの寄すなすいとのかきて愛しけ背ろに人さへ寄

すも

(14三五八) 東歌

(8) 多由比瀉瀬満ちわたるいづゆかも愛しき背ろが我がり通はむ

(14三五九) 東歌

(9) 阿遲可麻の渦にさく波平せにも紐解くもか愛しけを置きて

(14三五二) 東歌

(10) 古須気ろの浦吹く風のあとすか愛しけ子ろを思ひ過ごさむ

(14三五六) 東歌

●(11) 愛し妹をいづち行かめと山背のそがひに寝しく今し悔しも

(14三五七) 東歌

(12) 筑波嶺のさ百合の花の夜床にも愛しけ妹ぞ昼も愛しけ

(20四三六) 防人歌

(13) ……朝戸出の愛しき我が子 あらたまの年の緒長く……

(20四四〇) 大伴家持

(14) 障へなへぬ命にあれば愛し妹が手枕離れあやにかなしも

(20四四三) 防人歌

卷十四東歌と卷二十防人歌巻へのきわやかな集中がみられる。

右の一四例中、東国出身者の作ではないと思われる歌は(1)と(3)の二首のみであった。ただし、(3)の家持歌は防人歌巻に置かれた一首で、題詞には「防人が非別の情を陳ぶる一首」とある。すなわち家持は防人になりきってこの一首をよんだのであって、(12)や(14)の防人歌とまったく同じ表現を果たしている。残るは(1)の一首だが、この歌も本稿の見方を裏切るものではないと思われる。なぜ

なら、(1)は第三四句に関して訓みに不審の残る一首だからである。一首の原文は次のとおりである。

佐伯山 于花以之 哀我 子篤取而者 花散柄(二二五九)

傍線を付した第三四句に注目したい。寛永版本によると、第三句は「アハレワカ」、第四句は「コヲソトリテハ」と訓まれており、「佐伯山卯の花持ちし哀れ我が子をし取りてば花は散るとも」と訓み下すことができる。すなわち、(1)にあげた訳文の第三四句「愛しきが手をし取りてば」という訓みは、「代匠記」初稿本の

子は手の字の誤れるなるへし。哀の字此集にかなしとよみてあはれとよめる所なし。しかれば、うの花もちしかなしきが手をしとりてはとよみて意得へし

という解釈に拠つたもので、後の注釈書による誤字説であることが分かる。すなわち、一首を原文に忠実に訳せば「佐伯山で卯の花を持った可愛いあの子を取ることができたなら、いっそ花は散ってしまうとも構わない」となるのである。

しかし、確かに契沖の述べるとおり、「哀」の字を以ってカナシと訓む例は集中に存在しない。何より、本文に忠実に「子ヲ取ル」と訓めば、歌の意味が取り難い。その点、「代匠記」の訓みに従つた場合、「愛しいあの子の手を取ることができたなら、いっそ花は散ってしまうとも構わない」となり、歌意も明瞭である。ただし、万葉の時代、「子ヲ取ル」と「手ヲ取ル」ではどちらの表現がより自然なものであつたか知るのでなければ、一首の本

意はみえてこないであろう。そこで、「子ヲ取ル」と「手ヲ取ル」という表現が集中にどの程度存在するかを確認しておく必要があると思われる。まず、「子」という語は集中に九〇例みられるが、「子ヲ取ル」という表現となると、次にあげる田邊福麻呂の長歌の他に存在しない。

娘子を思ひて作る歌一首并せて短歌

白玉の人のその名を　なかなかに言を下延へ　逢はぬ日の数
多く過ぐれば　恋ふる日の重なりゆけば　思ひ遊るたときを
知らに　肝向かふ心砕けて　玉たすき懸けぬ時なく　□やま
ず我が恋ふる子を　玉釧手に取り持ちて　まそ鏡直目に見ね
ば　したひ山下行く水の　上に出でず我が思ふ心　安きそら
かも
(九一七九二・田邊福麻呂歌集)

ただ、傍線部をみれば分かるように、「子ヲ取ル」という直接的な表現ではなく、間に枕詞「玉釧」を挟み、比喩を用いて表わしている。このような表現から、「子」と「取る」との結びつきは強いと言い難い。

一方、「手」は集中に七四例みられ、その中で「手ヲ取ル」という表現には、次にあげる五例が存在する。

① 霰降り吉志美が岳をさがしみと草取りはなち妹が手を取る

(三八五)

② さ槍隈槍隈川の瀬を早み君が手取らば言寄せむかも

(七一〇九)

③ 隙が手を取りて引き攀ちふさ手折り我がかざすべく花咲ける
かも
(九一六八三)

④ 妹が手を取石の池の波の間ゆ鳥が音異に鳴く秋過ぎぬらし
(一〇二二六六)

⑤ 稻搗げばかかる我が手を今夜もか殿の若子が取りて嘆かむ
(一四三四五九)

*はしたての倉崎山を嶮しみと岩懸きかねてわが手取らすも
(記・歌謡七〇)

はしたての倉崎山は嶮しけど妹と登れば嶮しくもあらず
(七一)

右にあげた五例の中に、「玉釧手に取り持ちて」というような比喩を用いた表現はない。すべて「手ヲ取ル」と直接的な表現になつてゐる。加えて、③④のように初句「妹が手を」が枕詞として「取る」を導くといった表現さえみられるのである。こうした例は「手」と「取る」とが強い繋がりを持っていたことを示すものといえるであろう。また、補足として五例の後に*を付して「古事記」の歌謡をあげている。これをみれば、万葉集以外の記紀歌謡にも「手ヲ取ル」という表現がみられることが分かるであろう。なお、「古事記」には歌謡以外にも「手ヲ取ル」という表現が一〇例みられるが、「子ヲ取ル」という表現は一例もない。このようなことから、「代匠記」が「子は子の字の誤れるなるへし」とした誤字説は、ある程度信頼できるものではないかと推測される

のである。そして、今までみてきた結果からあえて次のように考
えてみた。

先述したように、「愛し〜」という表現は古代東国地方に限定
的な呼称と考えられる。そうした東国地方の歌に特徴的な表現が
(1)の歌の第三句にみられるということは、東歌・防人歌の表現が
巻七の京歌に影響を与えている、という推測が成り立ちしな
いだろうか。すなわち、巻十四の歌から巻七の歌への影響である。
そして、さらにここで注意すべきは、当該歌Ⅰの類歌としてあげ
たⅰの歌もまた、巻七の「挽歌」に存するということである。も
ちろん、Ⅰⅰの二首について、どちらが先によまれたか、その影
響関係を正確に知ることはまず不可能であろう。ただ、ここでは
一つの推論としてⅠからⅰへの影響関係を提示してみたいと思ふ。

三 第三句「山菅の」

続いて、第三句の違いに注目して考察を進めよう。初句と同様、
第三句の「山菅」と「さき竹」も集中によまれた例を参考に考察
したところ、非常に対照的な結果をみせる。Ⅰの第三句「山菅の」
という表現を持つ歌は集中に七首七例、「山菅」という素材では
一三例存在している。一方、ⅰの第三句によまれた「さき竹」と
いう素材はこの歌にしか存在しない。当然「さき竹の」が枕詞と
して「そがひ」を導くのもこの一例のみである。

集中に一例しか存在しない素材が類歌によみ込まれている理由

とは何か。先に述べた推論も考え合わせた上、本稿はその理由と
して、Ⅰからⅰへのよみ換えを想起してみたい。すなわち、東歌
であるⅠがまず先にあつて、それを参考に京の人々がよみ換えた
のがⅰの一首ではなかつたか。

右のような推論を持ち出す理由は、東歌の第三句「山菅の」と
いう枕詞の用法が、現在の我々には非常に分かり難いということ
にある。歌のとおりに意をとれば、「山菅のそがひに寝しく」は「山
菅のように背中合わせに寝たこと」となる。しかし、なぜ「山菅」
が「背中合わせ」の意を導き得るのかという点については、簡単
には想像されにくい。たとえば小学館『新編日本古典文学全集』
には「その細長い葉がそれぞれ別の方向に伸びているのでソガヒ
にかけた」とあり、このような解釈が現在一般的に理解されてい
るこの句の解釈であろう。ただし古く『仙覚抄』には、

ヤマスケハネノナカクシテ、モトノクサムラヨリハルカニト
ホクノキテ、コロコロニオヒシケルクサナレハ、セナカアハ
セニ、トホサカリユク心ニテ、今ノ歌ノ挽歌ナレハ、ソカヒ
ニネシクイマシクヤシモト、ヨソハヨメル也。

といった解釈もみられ、この場合、山菅の葉ではなく根に注目し
て解している。確かに、菅はその根が長いことで有名な植物であ
つた。集中「菅」をうたった六四首のうち、「菅の根」をうたつ
た歌が二八首を占めていることから、「菅」と「根」の結びつ
きの強さは容易に想像することができる。そして、その根を彼方

此方に延ばすことによつて、それぞれが遠いところに生育するという山菅の生態を踏まえ、仙覚は「セナカアハセニ、トホサカリユク心ニテ」と一首の歌意をとつたのであつた。また、同じように山菅の生態に着目しても、

山すけノそかひト云ルハ、山のそかひに、菅の生る心也。山の背とむかふことくに、夫婦せ中合せてねたること也。

と全く異なる解釈を施した注釈書（下河邊長流『萬葉集管見』）も存在する。そして、山菅の葉に注目した現在の一般的理解は、長流の弟子契沖が「代匠記」初稿本において、

山すけのそがひとつ、けたるは、葉のこなたかなたにわかれて、なひくものなれば、夫婦そむきてねたる事もありしを、悔るなり

としたのが始めてあり、その後、多くの注釈書がこの説に従つている。ただし、その後も「音の類似でソガにつづく。ま菅よし會我の例の如くである」とスゲとソガの音に類似性を見出す土屋文明『萬葉集私注』のような解釈がみられる。また、その他の注釈書においても、解釈の上で細かい揺れは存在するようだ。何より右をみれば、契沖の解釈に至るまで、古い時代の注釈者たちが「の歌の第三句を巡つてあれこれと思索した跡が確かに確認されるのである。すなわち、東歌の第三句「山菅の」の解釈は、現代の我々より遙かに万葉びとに近かつたであろう江戸時代の注釈者たちにとつても、やはり簡単には解し難い用法だつたといえるので

はないだろうか。

一方、iの第三句「さき竹の」の用法も簡単には解し難い。契沖「代匠記」が「さき竹とは、竹をわれは、せなか合になるをいふなり」と述べてから、その解釈に揺れはないものの、「竹をわれは、せなか合になる」の意味するところが、後の注釈書において次の④⑤に二分されるのである。

④サキタケは、割つた竹で、これを同じ向きに重ねると腹と背とが接するので、背向に冠するのであらう。

（武田祐吉『萬葉集全註釋』）

⑤割り竹は、今まで腹を付け合つていた状態から、割つたとたんに背中を向けてしまうから、かかるか。

（水島義治『萬葉集全注』）

確かに、何故「竹をわれは、せなか合になる」のか、現代の我々には理解し難い。しかし、契沖以前の注釈書をみれば、やはり契沖と同じく「竹をわれは、せなか合になる」という簡潔な解釈が載せられているのみである。このことから、江戸時代の注釈者たちにとつて、「山菅」と「そがひ」の結びつきより、「さき竹」と「そがひ」の結びつきの方が、はるかに理解しやすいものだったのでないかと推測される。

そして、それは古代京圏の人々にとつても同じだつたのではないだろうか。京圏の人々にとつて、「山菅」から「そがひ」への連想が難しいものだつた、と推測させる資料には、次のようなも

のもある。

(a) 山菅の実ならぬことを我れに寄せ言はれし君は誰れとか寝ら

む (四五六四、坂上郎女)

(b) 山菅の乱れ恋のみせしめつつ逢はぬ妹かも年は経につつ

(一一二四七四)

(c) 山川の水蔭に生ふる山菅のやまずも妹は思ほゆるかも

(一二二八六一)

(d) 山菅のやまずて君を思へかも我が心どのこのころはなき

(一二三〇五五)

(e) 妹待つと御笠の山の山菅のやまずや恋ひむ命死なずは

(一二三〇六六)

(f) 玉葛幸くいまさね山菅の思ひ乱れて恋ひつつ待たむ

(一二三二〇四)

右は京圈のものと覚しき歌々によまれた「山菅の」という枕詞の用例である。作者のはっきりした歌は(a)の坂上郎女の一首だが、

その他の歌もすべて巻十一か十二によまれたもので、京圈の歌であることは明瞭といえる。これらの例をみると、京において枕詞

「山菅の」が導くのは、(b)や(f)のように「乱れ」という語か、(c)

(d)(e)のように「や(止)まず」という語であることが分かる。あるいは(a)のように、山菅が実をつけないことから「実ならぬ」を

導く変わった例もあるが、大きくは山菅の根が長くて互いに絡まり合い乱れているところから「乱れ」を導く場合と、山菅のヤマ

という音を用いて「止まず」を導く場合とに二分される。すなわち中央においては、「山菅の」と来れば「乱れ」か「止まず」が続いてうたわれる、という認識が人々により浸透していたと思われるのである。その点からも、東歌のような「山菅」と「そがひ」の連想は、京人にとってやはり難しいものではなかったか。

だからといって、本稿は必ずしもIの東歌が先によまれ、それを京の人々がIの歌により換えたというのではない。先にも述べたように、右の推論は単なる一考察として提起したもので、二首の歌のどちらが先によまれたものであるか、現段階で特定することは難しいからである。しかし、はっきり言えることとして、Iの東歌にみられるような枕詞「山菅の」が「そがひ」を導くという表現技法は、同じ「山菅の」という枕詞をもつ京の歌においては、一例もみられなかったということだ。そういう意味では初句と同様、この第三句も非常に東歌らしい表現であったといえるのではなからうか。

以上、当該歌についてその類歌との相違点から、初句「愛し妹を」と第三句「山菅の」に着目し考察を進めてきた。その結果、初句と第三句はともに他の巻にはみられない東歌に特徴的な表現であったということがわかる。すなわち、巻十四東歌はまさに東歌らしい挽歌一首によって、その一巻を結ばれたのであった。

冒頭で述べたように、「全釈」には一首について「東歌らしくない作だ」という評が存在した。また、本稿が推論した東歌Iか

ら京歌 i への推移も、ほとんどの注釈書が i から I へという全く逆の経路を想定している。ただし、その理由については「東歌らしくない」というその一点で片付けてしまっている感があり、それ以外の理由としては、ただ一つ「私注」が次のように述べたものがあげられるだけである。

卷七、(一四二二)に「吾が背子を何處行かめとさき竹のそがひに寝しく今し悔しも」とあったのと、男女立場を變へて居る。「背向に寝しく」は女の立場として始めて感動的である。歌ひかへとしては拙いものとなつた。

なるほど確かに説得力がある。しかし何れにしても、I i のどちらが先によまれたか現段階で特定することは難しい。ただ今は、「全釈」が「東歌らしくない」とした評に、一首の初句と第三句の有り様とその真意を以つて疑問を呈するにとどめようと思う。

四 結

当該歌がかつて「東歌らしくない」と評されたのは、一首がもつたはずまいともいふべき雰囲気からではなかつたか。確かに東歌の挽歌一首は、一見すっきりしていて京風である。卷十四に載せられている多くの東歌にみられるような東国の俚言をまったく含まない上に、第三句「山背の」を除き、歌の意味も比較的とり易い。全体に歌意の通らない歌を多く含む卷十四の特徴を考えたとき、当然気付くべき一首の性質であつた。

しかし、その初句と第三句について、表現の特徴という面から一首を細かく考察したとき、それはやはり東歌らしい歌として位置づけることが可能であろう。そうした意味では、いくら歌の構成が似ているとはいへ、当該歌は類歌と明確に区別されるのである。

ひるがえって、一首のこうした性質はIIの歌においてもまた同様に言えることであつた。すなわち、東歌と防人歌巻の結びに位置するIIの二首をそれぞれの類歌 i ii と比較したとき、その類歌関係から浮かび上がってくる二首の不思議な類似である。

II ii の二首も非常に似通つた歌ではあるが、傍線を付した上二句の「闇の夜の行く先知らず」と「大海の奥かも知らず」という表現を以つてその違いが明白である。というのは、同じ旅歌であっても、二首は旅の往路でよまれたのか、あるいは復路でよまれたのか、という点に違いがあるため、上二句の表現が大いに異なるのである。大宰府に向かう防人の歌IIは往路、iiは逆に帰京する際の歌なので復路、古代の旅は言うまでもなく往路の方が精神的に過酷であつた。まさに「闇の夜の行く先知らず」行く旅だからである。その点、類歌によまれた船旅がいかに危うく「大海の奥かも知らず」行く旅であつたとしても、その目的地が我家であることを思えば、防人の往路の旅の苦しみには及ぶべくもない。つまり、IIはその類歌 ii と比べ、まさに防人の旅の過酷さを表わす、防人歌巻を結ぶに相応しい歌であつたといふことができるの

である。

そして、卷十四東歌の結びに置かれたIの歌も、iの類歌と比較すればその東歌らしさは際立っている。「愛し妹」とうたい起こし、そして「山菅」という素材を用いて「そがひ」を導くという発想の特異性も、東国においてこそ理解される表現ではなかつただろうか。他の巻に非常に似通った歌を持ちながらも、二首はそれぞれに防人歌巻や東歌の結びとして、見事にその役割を果たしている。こうした結びの二首I・IIが持つ驚くばかりの類似性には、やはり編纂者の強い意図を感じざるをえないのである。

注

(1) 管見の限りではわずかに、桜井満「万葉集卷十四と挽歌」上代文学第一六号、中金満「東歌の挽歌一首」解釈三八七集が一首について触れているのみである。

(2) この点も含め、IIの一首に関して別途、詳しい論を構えたい。(まえりつえ 岡山大学院文化科学研究科)

研究室受贈圖書雑誌目録I

(平成十八年一月〜十二月)

〈単行本・報告書〉

古事記の真実 空の巻 (二宮陸雄著 愛育社刊)
古典和歌における鐘の研究―日中比較文化的考察― (劉小俊著 風間書房刊)

国文学研究資料館 (大学共同利用機関法人人間文化研究機構)

国文学研究資料館の研究活動 (国文学研究資料館)

堺学から堺・南大阪地域学へ―南大阪地域の文化基盤― (大阪府立大学)

重山文庫雑誌目録 (新村出記念財団)

多言語社会に貢献する言語教育学研究者養成プログラム報告集I

(東京外国語大学大学院地域文化研究科言語教育学プログラム推進室)

地域文化研究叢書1 兵庫名所記 (武庫川女子大学大学院文学研究科日本語日本文学専攻)

日本語と日本人 (広島女学院大学)

パリ東洋語図書館蔵日本書籍目録 一九二二年以前 (国文学研究資料館)

明治の青春 (金沢大学大学院文学研究科上田研究室)

〈雑誌〉

愛知大学国文学 (愛知大学国文学會) 四五

愛知淑徳大学国語国文 (愛知淑徳大学国文学會) 二九

青山語文 (青山学院大学日本文学会) 三六

霞 (山崎勝昭) 十三、十四

岩手郷土文学の研究 (岩手郷土文学研究会) 六

宇都宮大学国語教育学会 (宇都宮大学国語教育学会) 十七